

[スキマ]から考える 居場所あるまち

閉じながらも開く住まい方の提案



1 はじめに

1-1 幼少期の私

私は幼少期、父の影響で引っ越しを繰り返して何度も転校を経験した。大学院生となった今、地方から出てきた友人と接する中で明確な故郷と呼べる場所がある数人に憧れを持ち、自分の故郷や居場所はここなの疑問に思った。そんな人々が、初めて訪れたまちでも自らの居場所を見つけられる、そんな街や建築を考え始めた。



1 幼少期の私



初めて訪れたまちでも自らの居場所を見つけられる、そんなまちや建築を考えたい

1-2 商店街を対象にした研究

学部生時、研究室活動の一環で六角橋商店街を対象にその街ならではのものを収集した際、私は建物同士の隙間や空き地といった商店街スケールの隙間の取壊・空間調査を行った。調査の中でそこに居る出店人の振る舞いや生活にどこか懐かしさや温かみを感じ、こうした身近にある人々の暮らしの跡が、世間だけではなく初めて訪れた人にも受け入れる余力のある都市を形築していくのではないかと考えるようになった。

門型



視線の先の景色を切り取り、そのまま人を選び込む。スキマが大きくなることと切り取る風景もより大きくなり、シンボリックを持つ建築になっていく。

分調型



建物の間の隙間はその大きさによって倉庫から住居スペースまでさまざまな使い方ができる。あえて小さな空間である方が安心感を生みだりもする。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

1-3 隙間への関心

学部生時の調査の中で隙間空間は「境界とよび、隣接・まちを知るきっかけ・可塑性」といったポジションをもつ。人と人をつなげることも分けることでもできる柔軟な空間であると感じた。



[隙間]・[鍵]の調査・分析

周辺建物の生活や風情が透過
人間味
人々の活動の溢れ出し

単独の扉は、空間や人の
コミュニティなどの境界をどう
構築するかによって異なる。

個人が所有するモノが暮らし
とともに移動されることで
隙間の空間性も変化していく。

人の活動が見える隙間は、ま
ちの暮らしをよりリアルな
ものとして見えてくれる。

2. 本研究の目的

まち中のスキマの調査からまちの境界性がどうあるべきかを考察し、その表れとして
漸を内部化することで閉じながらも開く新たな住まいかたを提案する。

3. スキマの現状と問題

商店街で発見した隙間からまちにあるより多様なスキマに範囲を広げ、特徴的な人々の活動の溢れ出しとスキマが変化させる可能性について調査・分析・考察を行った。

3-1 スキマの定義

スキマと建物の関係

- 1: 一層以上の建物に挟まれている
- 2: 道路に接する
- 3: 車が侵入出来ない幅

商店街のスキマを対象にした調査
↓
まちにあるスキマを幅広く調査
↓
調査対象のスキマ条件として
まち中のスキマを幅広く収集

学部時の研究の次ステップとして商店街だけでなくより広い地域のスキマを調査するため、以上の3点を調査対象の「スキマ」条件として収集を行うこととする。

3-2 分析スキマモノカード

収集した100のスキマのうち活動の溢れ出し評価が最も高いものについて、スケッチをしてその空間の再認識を行い特徴的なオブジェクトをスキマモノと捉えて抽出した。

スキマ一覧表内通し番号
スキマタイトル
スケッチ記録

09 配管ヒモツキチ
撮影場所: 東京都目黒区桜木4丁目32-7
断面形状: J型
3階建て 店舗兼住宅 / 2階建て 店舗兼住宅
特徴的なオブジェクト: 張り渡る配管 物干しナラス

抜付	層別	1層凹凸	1層凹凸	エントランス	開口	扉	幅	評価	
×	×	×	×	0	1	1	×	1500	5

75 高さレストラン
80 縦長の通路

5 敷地概要

対象敷地は JR 阿佐ヶ谷駅の北東側の住宅地。駅から続くメイン通り沿いは鉄道を八百屋、豆腐屋などの店舗が並ぶ雑居ビルが並ぶ。その一方で住宅地は敷地が狭小な狭小住宅地と建物が高層化している。



駅からまじりに伸びる大通り沿いをたどって歩く小さなスキマのワークエンスが連続して現れる。まじり合いのスキマは人々を誘い込む。地域で暮らす人も初めて訪れる人もそれぞれの生活に繋がりを生み出す。新たな方法で活用して解決する。

■ 主幹線と地域動線



■ 駅の南北エリアの相違



6 計画概要

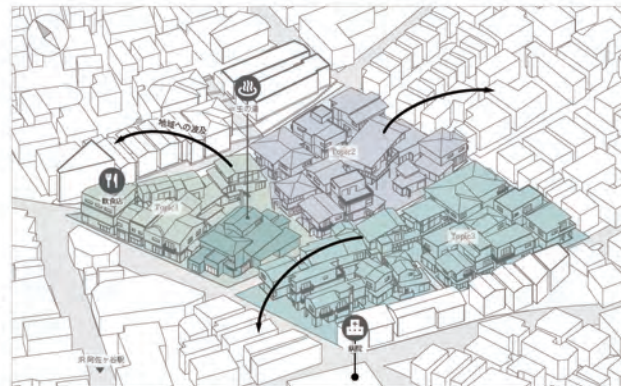
本計画は鉄道に関連したコミュニティのための機能を持つ3件の新築計画と、その周辺の住宅計28件の改修・再編計画である。3つのTopic 分けによる全体計画と新築の公共建築の設計を行なった後、層の内部化とスキマへのヨリコソを用いながら集居改修を行い、まちや外に向けて開きながらも開く住まい方を提案する。



7 全体計画

敷地をスキマ分類や動線の特性ごとに3つのTopicに分類し、それぞれでの境界の操作や新たなスキマのあり方、周辺の建物との向き合いなどをスタディ。その設計概念地全体を一体的に計画していく。

住居と商業を隣り合わせたスキマを想定し、交通の便が上がることで、人の暮らしと共に多様なスキマが生まれるに期待し、新たな暮らしの場を提案する。



7-1 Topicごとのスキマ構成

スキマ分類に関連してスキマを「おまじり・ひらく・つなぐ」ことで新たな建築とスキマの関係性を構築する。さらにこれらが都市・地域・個人それぞれの間をつなぐ重要な役割を果たす空間となることで地域内外の交流を促す。

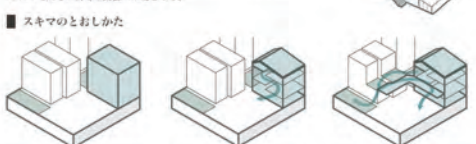
■ 都市とまちとひととスキマ



D E 共有型

Topic1 住宅前に人を誘い込む鉄道のすずみ空間

駅前広場、住人テラス、開放しゅーも
点在するスキマを周辺の空き部屋やテラスと一体的に計画することでつなぐ。鉄道を利用する人や歩行者をまちへ誘い込む。これによってまちのつながりや新たな出会いの場となる。



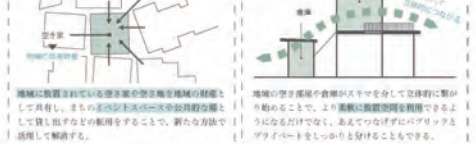
■ スキマのおしかた

点在する小さなスキマの敷地 → 立体的な動線を計画する → 空き部屋を介してスキマをつなぐ

小さな部屋が点在しており、それぞれ単体ではあまり有効に活用できず、人の暮らしを生かすことができない。

全体をスキップフロアとし、1層を単体で活用することで、立体的な動線を計画し、まちのつながりや新たな出会いの場となる。

周辺の空き部屋を介して建物の動線とスキマをつなぐことで、人やまちをよりよくつなぐ。



A 旗竿地型

Topic2 暮らしの拠点を外に向けた鉄道のコミュニティ空間

共同書庫、シェアリビング、スキマ食堂、趣味工房
旗竿地状のスキマに対して建物の角を削ってひらくことで後述の旗竿地型を作る。さらにひらくことで広くなった隣家と直接接続させ、一体的に計画することで人々の新たなコミュニティを育んでいく。

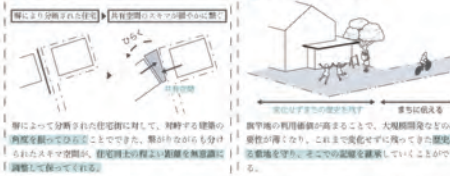


■ スキマのひろきかた

旗竿地状のスキマのある敷地 → 角度を削ってスキマをひらく → 接続する建物と一体的に計画

旗竿地状のスキマに対して建物の角を削ってひらくことで後述の旗竿地型を作る。さらにひらくことで広くなった隣家と直接接続させ、一体的に計画することで人々の新たなコミュニティを育んでいく。

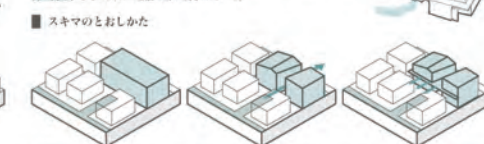
旗竿地状のスキマに対して建物の角を削ってひらくことで後述の旗竿地型を作る。さらにひらくことで広くなった隣家と直接接続させ、一体的に計画することで人々の新たなコミュニティを育んでいく。



B C 共有道路型

Topic3 暮らしの拠点を外に向けた日常サテライト空間

コワーキング、カフェ、託児所、スタディールーム、共有キッチン
共有道路からのスキマを建物内へ通すことで都市からの人の新たな動線となる。地域の生活動線が広がることで、住居内に留まっていた暮らしの拠点を外へ向け、まちの人々の生活の場が広がっていく。



■ スキマのおしかた

共有道路の敷地にある敷地 → 建物とスキマをおす → 2階をテラスにより接続する

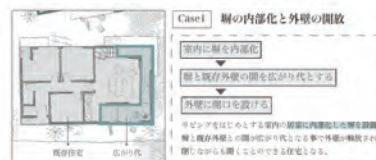
共有道路に面する敷地である敷地の角の角を削って人々を誘い込む。さらにひらくことで広くなった隣家と直接接続させ、一体的に計画することで人々の新たなコミュニティを育んでいく。

共有道路に面する敷地である敷地の角の角を削って人々を誘い込む。さらにひらくことで広くなった隣家と直接接続させ、一体的に計画することで人々の新たなコミュニティを育んでいく。



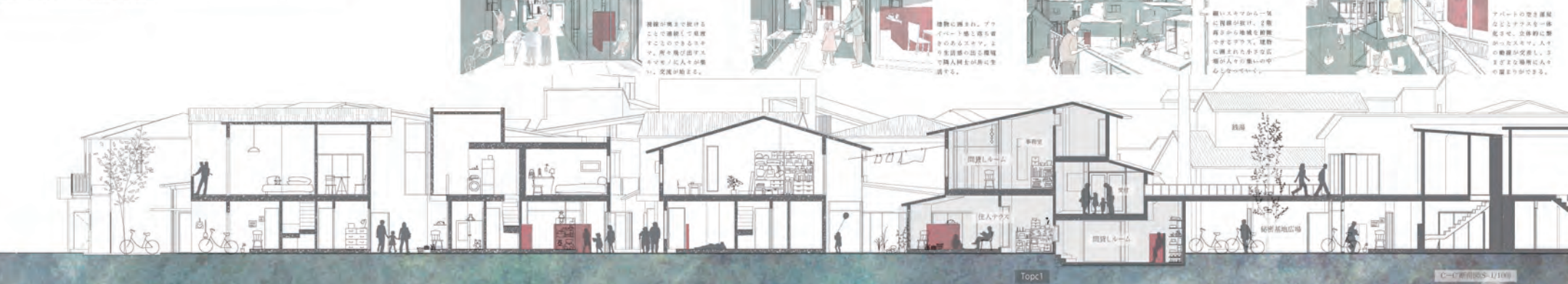
8 改修による層の内部化

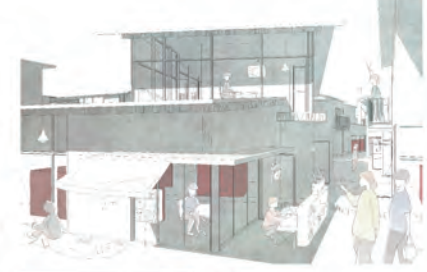
スキマに関連した3軒の新築に対し、残りの28軒の住居については改修による内部化を行う。既存の居室の階層や部屋の配置の改善、壁面・天井・床の活用状況などを考慮し、それぞれに適した改修を行う。改修の仕方については主に下記の3つのケースを軸に計画していく。



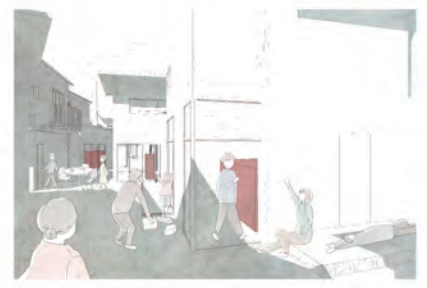
9 連続してあらわれるスキマ

駅から南北に伸びる大通り沿いをたどって歩く小さなスキマのワークエンスが連続して現れる。まじり合いのスキマは人々を誘い込む。地域で暮らす人も初めて訪れる人もそれぞれの生活に繋がりを生み出す。新たな方法で活用して解決する。

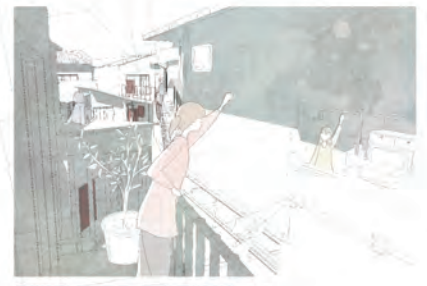




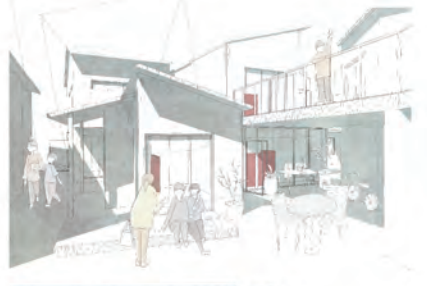
Scene 1: 外に出る非日常空間
 共有書庫から天気の良い日には外まで本棚が溢れ出し、通行人たちも足を止める。古本の交換会や、阿比ヶ谷のまちに関する情報などをはじめとしたさまざまな機会により、滞在が自然と情報交換の機会に発展する。



Scene 2: 各々が好きな集まり体目
 料理と集いの場にできたセミプライベートな空間。室内から外のつづぎに合った緑植スペース。それぞれが好きなことで空間を遊覧する多様な集まり体を実現する。人々は集いの場を通して多様な集いの場を生み出す。



Scene 3: 近隣住民と交差するあいさつ
 狭いスキマを間にもつ扉面している開口から、多くの近隣住民同士との交流が生まれる。広がり代として外部に表出した空間の視線には人がのびり、近隣住民と交差する視線の場が生まれ、近隣住民との関係性が保たれる。



Scene 4: 狭いスキマが、温かい集いの場
 狭いスキマを間にもつ扉面してしまうのではなく、扉面をスキマを狭くした先の集いの場が、集いの場を生み出し、集いの場を生み出し、集いの場を生み出す。人々の交流が日常の生活の一部となる。

10人の跡残る風景

広がり代の敷地により変化するスエズで、内部化した層に寄り添うように営まれる人々の暮らし。スエズが生活のネットワークを重層的に分布させ、都市の中に集約のような共同体の網が敷かれていく。